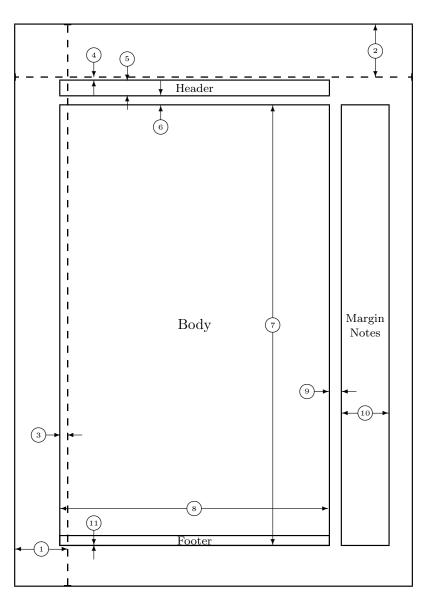
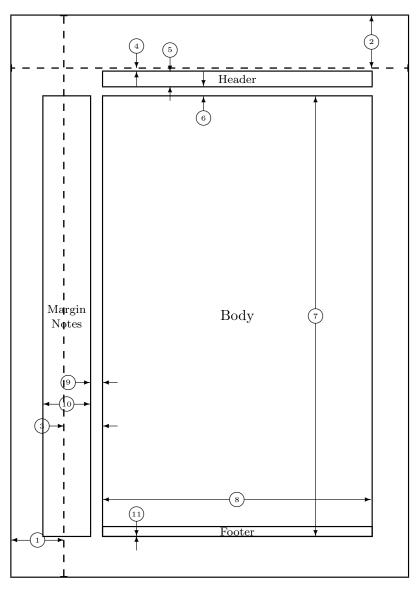
Notes on Sheaves on Manifolds

大柴寿浩



- 1 one inch + \hoffset
- 3 \oddsidemargin = -10pt
- 5 \headheight = 20pt
- 7 \textheight = 604pt
- 9 \marginparsep = 18pt
- 11 \footskip = Opt
   \hoffset = Opt
   \paperwidth = 545pt
- 2 one inch + \voffset
- 4 \topmargin = 5pt
- 6 \headsep = 14pt
- 8 \textwidth = 369pt
- 10 \marginparwidth = 64pt
   \marginparpush = 16pt (not shown)
   \voffset = 0pt

\paperheight = 771pt



- 1 one inch + \hoffset
- 3 \evensidemargin = 54pt
- 5 \headheight = 20pt
- 7 \textheight = 604pt
- 9 \marginparsep = 18pt
- 11 \footskip = Opt
   \hoffset = Opt
   \paperwidth = 545pt
- 2 one inch + \voffset
- 4 \topmargin = 5pt
- 6 \headsep = 14pt
- 8 \textwidth = 369pt
- 10 \marginparwidth = 64pt
  \marginparpush = 16pt (not shown)

\voffset = Opt

\paperheight = 771pt

# はじめに

2023 年度から始めた [KS90] のセミナーのノート.

## 記号

次の記号は断りなく使う.

- 添字: なんらかの族  $(a_i)_{i\in I}$  を  $(a_i)_i$  とか  $(a_i)$  と略記することがある.
- 近傍:位相空間 X の点 x や部分集合 Z に対し、その開近傍系をそれぞれ  $I_x$  や  $I_Z$  で表す。これらは、包含関係の逆で有向順序集合をなす。

## 第1章

# ホモロジー代数

## 1.3 複体の圏

℃を加法圏とする.

注意. 加法圏とは次の3つの条件(1)-(3)をみたす圏のことである.

- (1) どの対象  $X,Y \in \mathcal{C}$  に対しても  $\operatorname{Hom}_{\mathscr{C}}(X,Y)$  が加法群になり、どの対象  $X,Y,Z \in \mathcal{C}$  に対しても合成  $\circ$ :  $\operatorname{Hom}_{\mathscr{C}}(Y,Z) \times \operatorname{Hom}_{\mathscr{C}}(X,Y) \to \operatorname{Hom}_{\mathscr{C}}(X,Z)$  が双線型である.
- (2) 零対象  $0 \in \mathcal{C}$  が存在する. さらに  $\operatorname{Hom}_{\mathcal{C}}(0,0) = 0$  が成り立つ.
- (3) 任意の対象  $X,Y \in \mathcal{C}$  に対して積と余積が存在し、さらにそれらは同型になる、 (それらを複積といい  $X \oplus Y$  とかく、)

圏  $\mathscr C$  から、 $\mathscr C$  の対象の複体の圏  $\mathbb C(\mathscr C)$  を作ることができる。まず複体の定義をする。圏  $\mathscr C$  の対象のと射の列

$$(1.3.1) \cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

を考える. この列  $X=((X^n)_{n\in \mathbf{Z}},(d_X^n)_{n\in \mathbf{Z}})$  が複体 (complex) であるとは、任意の  $n\in \mathbf{Z}$  に対し

$$(1.3.2) d_X^{n+1} \circ d_X^n = 0$$

が成り立つことをいう.

圏  $\mathscr C$  の対象の複体  $X=((X^n),(d_X^n)),\ Y=((Y^n),(d_Y^n))$  の間の射を、 $\mathscr C$  の射の族  $(f^n\colon X^n\to Y^n)_{n\in \mathbf Z}$  で、図式

$$\cdots \longrightarrow X^{n} \xrightarrow{d_{X}^{n}} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

$$\downarrow^{f^{n}} \qquad \downarrow^{f^{n+1}}$$

$$\cdots \longrightarrow Y^{n} \xrightarrow{d_{Y}^{n}} Y^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

を可換にする, すなわちどの番号  $n \in \mathbb{Z}$  に対しても

$$(1.3.3) d_Y^n \circ f^n = f^{n+1} \circ d_X^n$$

が成り立つものとして定める.

以上の準備のもとで、 $\mathscr C$  の複体の圏  $\mathrm{C}(\mathscr C)$  を次のように定める.

- 対象: Ob(C(ℰ)) = {ℰの複体 }
- 射: $\operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathscr{C})}(X,Y) = \{\mathscr{C} \ の複体の射 \}$

このとき、 $C(\mathscr{C})$  は加法圏になる.

圏になることの証明.  $f\colon X\to Y$  と  $g\colon Y\to Z$  を  $\mathrm{C}(\mathscr{C})$  の射とする. f と g の合成  $g\circ f$  は  $(g^n\circ f^n)_n$  で与えられる. これがうまくいくことは

が可換になることからわかる.

$$X$$
 の恒等射は  $(id_{X^n})_n$  で与えられる.

加法圏になることの証明.  $X と Y を \mathcal{C}$  の複体とする.

- (1) 射の集合のアーベル群構造  $f,g \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathscr{C})}(X,Y)$  に対し,f+g が  $(f^n+g^n)_n$  で 定まる.
- (2) 零対象の存在  $C(\mathscr{C})$  の零対象 0 は

$$\cdots \rightarrow 0 \xrightarrow{0} 0 \xrightarrow{0} 0 \rightarrow \cdots$$

で与えられる.

(3) 複積の存在 X と Y の複積  $X \oplus Y$  は

$$\cdots \longrightarrow X^{n-1} \oplus Y^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1} \oplus d_Y^{n-1}} X^n \oplus Y^n \xrightarrow{d_X^n \oplus d_Y^n} X^{n+1} \oplus Y^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

さらに $\mathscr{C}$ がアーベル圏ならば、 $C(\mathscr{C})$ もアーベル圏になる.

注意. 加法圏  $\mathscr{C}$  がアーベル圏であるとは次の条件 (4), (5) をみたすことをいう.

(4) 任意の  $\mathscr{C}$  の射  $f: X \to Y$  に対し、f の核  $\operatorname{Ker} f$  と余核  $\operatorname{Coker} f$  が存在する.

1.3 複体の圏

(5) 任意の  $\mathscr C$  の射  $f: X \to Y$  に対し、自然に定まる射  $\operatorname{Coim} f \to \operatorname{Im} f$  は同型である.

証明. X と Y を C の複体とする.

(4) 核と余核の存在 複体の射  $f: X \to Y$  に対し、核  $\operatorname{Ker} f$  は  $(\operatorname{Ker} f^n)_n$  で、余核  $\operatorname{Coker} f$  は  $(\operatorname{Coker} f^n)_n$  で与えられる.

コメント (4/24). 「Ker f の differential の構成はどうなっていますか?」 次の図式を考える.

ここで、 $\iota^n$  は  $\mathrm{Ker}\, f^n$  の普遍性から自然に定まる射である。  $\overline{d}_X^n$ :  $\mathrm{Ker}\, f^n \to \mathrm{Ker}\, f^{n+1}$  が  $d_X^n \circ \iota^n$  によって定められることを示せば良い.

$$f^{n+1} \circ d_X^n \circ \iota^n = d_Y^n \circ f^{n+1} \circ \iota^n = d_Y^n \circ 0 = 0$$

より,  $d_X^n \circ \iota^n$  は  $\operatorname{Ker} f^{n+1}$  に値を取る. したがって,  $\overline{d}_X^n$ :  $\operatorname{Ker} f^n \to \operatorname{Ker} f^{n+1}$  が定まる.

(5) 余像と像が同型になること 各次数 n ごとに  $\mathrm{Coim}\,f^n\cong\mathrm{Im}\,f^n$  が成り立つことから 従う.

圏  $C(\mathscr{C})$  の充満部分圏  $C^+(\mathscr{C})$ ,  $C^-(\mathscr{C})$ ,  $C^b(\mathscr{C})$  を

$$Ob(C^{+}(\mathscr{C})) = \left\{ 0 \to X^{n} \xrightarrow{d_{X}^{n}} X^{n+1} \to \cdots \quad (n \ll 0) \right\},$$

$$Ob(C^{-}(\mathscr{C})) = \left\{ \cdots \to X^{n-1} \xrightarrow{d_{X}^{n-1}} X^{n} \to 0 \quad (n \gg 0) \right\},$$

$$Ob(C^{b}(\mathscr{C})) = \left\{ 0 \to X^{n} \to \cdots \to X^{m} \to 0 \quad (n \ll 0, m \gg 0) \right\}$$

で定める.

 $\mathscr{C}$  の対象 X に対し  $C(\mathscr{C})$  の対象

$$\cdots \to 0 \to X \to 0 \to \cdots$$

を対応させることによって、忠実充満な関手  $\mathscr{C} \hookrightarrow \mathrm{C}(\mathscr{C})$  が定まる. k を整数とする.  $\mathscr{C}$  の複体

$$X: \cdots \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdots$$

に対し,X[k] を  $X[k]^n = X^{n+k}$ , $d^n_{X[k]} = (-1)^k d^{n+k}_X$  で定める.図式でかくと

$$X[k]: \cdots \to X^{n+k-1} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k-1}} X^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} X^{n+k+1} \to \cdots$$

のようになる. X から Y への射  $f: X \to Y$  に対し、 $f[k]: X[k] \to Y[k]$  を  $f[k]^n = f^{n+k}$  で定める. X を X[k] に対応させることで関手  $[k]: C(\mathcal{C}) \to C(\mathcal{C})$  が定まる. この関手を次数 k のシフト関手と呼ぶ.

[k] が関手になることの証明. X[k] が複体になること:

$$(-1)^k d_X^{n+k} \circ (-1)^k d_X^{n+k-1} = (-1)^{2k} d_X^{n+k} \circ d_X^{n+k-1} = 0.$$

f[k] が複体の射になること:

$$\cdots \longrightarrow X^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} X^{n+k+1} \longrightarrow \cdots$$

$$\downarrow^{f^{n+k}} \qquad \downarrow^{f^{n+k+1}} \downarrow$$

$$\cdots \longrightarrow Y^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_Y^{n+k}} Y^{n+k+1} \longrightarrow \cdots$$

が可換になることを示せばよい.

$$f^{n+k+1} \circ (-1)^k d_X^{n+k+1} = (-1)^k f^{n+k+1} \circ d_X^{n+k+1} = (-1)^k d_Y^{n+k+1} \circ f^{n+k}.$$

[k] が合成を保つこと:  $f: X \to Y, g: Y \to Z$  を複体の射とする. このとき

$$(g[k] \circ f[k])^n = g[k]^n \circ f[k]^n = g^{n+k} \circ f^{n+k} = (g \circ f)^{n+k} = (g \circ f)[k]^n$$

が成り立つ.

$$[k]$$
 が恒等射を保つこと: $\mathrm{id}_X[k]^n=\mathrm{id}_X^{n+k}=\mathrm{id}_{X[k]}^n$ .

■ホモトピー  $\mathscr{C}$  の複体の圏  $C(\mathscr{C})$  から、ホモトピックな射を同一視することによって、新たな圏  $K(\mathscr{C})$  が得られる。まず準備。

 $C(\mathscr{C})$  を圏  $\mathscr{C}$  の複体の圏とする.  $X,Y \in C(\mathscr{C})$  とする.  $f: X \to Y$  が 0 にホモトピックであるとは、 $\mathscr{C}$  の射の族  $(s^n: X^n \to Y^{n-1})$  で、

(1.3.4) 
$$f^n = d_Y^{n-1} \circ s^n + s^{n+1} \circ d_X^n \quad (n \in \mathbf{Z})$$

となるものが存在することをいう.

 $f,g: X \to Y$  に対し、f-g が 0 にホモトピックであるとき、f と g はホモトピックであるといい、 $f \simeq g$  とかく、f が 0 とホモトピックであることを  $f \simeq 0$  で表す、このとき  $s=(s^n)$  を f と g の間のホモトピーという、 $\simeq$  は同値関係である、

証明. f, g, h を X から Y への  $\mathscr{C}$  の複体の射とする.

反射律  $(s^n = 0)$  が f と f の間のホモトピーを与える.

1.3 複体の圏 5

対称律 f と g の間のホモトピーを s とするとき, -s が g と f の間のホモトピーを与える.

推移律  $f \ge g$  の間のホモトピーを  $s, g \ge h$  の間のホモトピーを  $t \ge t$  とする.このとき,s+t が  $f \ge h$  の間のホモトピーを与える.

命題 1.3.1.  $X,Y \in C(\mathscr{C})$  に対し、 $\mathrm{Hom}_{C(\mathscr{C})}(X,Y)$  の加法部分群  $\mathrm{Ht}(X,Y)$  を

で定める. 複体の射  $f\colon X\to Y$  と  $g\colon Y\to Z$  のどちらかが 0 にホモトピックならば,合成  $g\circ f$  は 0 にホモトピックになる. したがって,射の合成は次の写像をひきおこす.

$$\operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathscr{C})}(Y,Z) \times \operatorname{Ht}(X,Y) \to \operatorname{Ht}(X,Z),$$
  
 $\operatorname{Ht}(Y,Z) \times \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathscr{C})}(X,Y) \to \operatorname{Ht}(X,Z).$ 

証明.  $f \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathscr{C})}(X,Y), g \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{C}(\mathscr{C})}(Y,Z)$  とする.

 $f \simeq 0$  のとき,  $s \in 0$  とのホモトピーとすると,  $g \circ f \in 0$  との間のホモトピーは

$$(q^{n-1} \circ s^n : X^n \to Y^{n-1} \to Z^{n-1})_n$$

で与えられる.

 $g \simeq 0$  のとき,  $t \geq 0$  とのホモトピーとすると,  $g \circ f \geq 0$  との間のホモトピーは

$$(t^n \circ f^n \colon X^n \to Y^n \to Z^{n-1})_n$$

で与えられる.

以上の準備のもとで、圏  $\mathscr C$  のホモトピー圏  $\mathrm K(\mathscr C)$  を次のように定める.

- 対象:  $Ob(K(\mathscr{C})) = Ob(C(\mathscr{C}))$
- $\mathfrak{h}: \operatorname{Hom}_{K(\mathscr{C})}(X,Y) = \operatorname{Hom}_{C(\mathscr{C})}(X,Y) / \operatorname{Ht}(X,Y)$

 $K(\mathscr{C})$  は加法圏になる.

 $K(\mathscr{C})$  が加法圏になることの証明. 命題 1.3.1 より、射の合成がきちんと定まる.

各  $X,Y \in \mathrm{K}(\mathscr{C})$  に対する  $\mathrm{Hom}_{\mathrm{K}(\mathscr{C})}(X,Y)$  のアーベル群構造は  $\mathrm{Ht}(X,Y)$  による剰余群の構造として得られ、さらに命題 1.3.1 より、合成の双線型性が得られる.

零対象と複積は  $\mathrm{C}(\mathscr{C})$  と同様である.

圏  $K(\mathscr{C})$  の充満部分圏  $K^+(\mathscr{C})$ ,  $K^-(\mathscr{C})$ ,  $K^b(\mathscr{C})$  を,それぞれ  $C^+(\mathscr{C})$ ,  $C^-(\mathscr{C})$ ,  $C^b(\mathscr{C})$  と同じ対象をとって定める.

**■コホモロジー**  $\mathscr{C}$  をアーベル圏とする.  $X \in C(\mathscr{C})$  に対し,

$$\begin{split} Z^k(X) &\coloneqq \operatorname{Ker} d_X^k, \\ B^k(X) &\coloneqq \operatorname{Im} d_X^{k-1}, \\ H^k(X) &\coloneqq \operatorname{Ker} d_X^k / \operatorname{Im} d_X^{k-1} \end{split}$$

とおく.  $H^k(X)$  を複体 X の k 次のコホモロジーという.

注意. 完全列  $0 \to X \to Y \to Z \to 0$  に対し、Z を Y の商対象といい、Y/X とかく. 一般に単射  $i: X \hookrightarrow Y$  の余核 Coker i を Y/X とかける.

任意のkに対し $H^k$ は $C(\mathscr{C})$ から $\mathscr{C}$ への加法関手を定める.

(1.3.6) 
$$H^k(X) = H^0(X[k])$$

 $f\colon X\to Y$  が 0 とホモトピックならば, $H^k(f)\colon H^k(X)\to H^k(Y)$  は 0. よって  $H^k$  は  $\mathrm{K}(\mathscr{C})$  から  $\mathscr{C}$  への関手を定める.

完全列たち

$$\begin{split} X^{k-1} &\to Z^k(X) \to H^k(X) \to 0, \\ 0 &\to H^k(X) \to \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \to X^{k+1}, \\ 0 &\to Z^{k-1}(X) \to X^{k-1} \to B^k(X) \to 0, \\ 0 &\to B^k(X) \to X^k \to \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \to 0, \\ 0 &\to H^k(X) \to \operatorname{Coker} d_X^{k-1} \xrightarrow{d_X^k} Z^{k+1}(X) \to H^{k+1}(X) \to 0. \end{split}$$

命題 1.3.2.  $0 \to X \to Y \to Z \to 0$  を  $\mathbf{C}(\mathscr{C})$  の完全列とする. このとき,  $\mathscr{C}$  における次の長完全列が存在する.

$$\cdots \to H^n(X) \to H^n(Y) \to H^n(Z) \xrightarrow{\delta} H^{n+1}(X) \to \cdots$$

■切り落とし  $X \in \mathcal{C}(\mathscr{C})$  と整数 n に対し、 $\tau^{\leq n}(X), \tau^{\geq n}(X) \in \mathcal{C}(\mathscr{C})$  を

で定める.このとき、 $C(\mathscr{C})$  における次の射が得られる.

$$\tau^{\leq n}(X) \to X, \quad X \to \tau^{\geq n}(X),$$

また,  $n' \leq n$  ならば

$$\tau^{\leq n'}(X) \to \tau^{\leq n}(X), \quad \tau^{\geq n'}(X) \to \tau^{\geq n}(X).$$

- - 2. 自然な射  $H^k(X) \to H^k(\tau^{\geq n}(X))$  は  $k \geq n$  ならば同型であり, k < n では  $H^k(X) = 0$  である.

#### 注意 1.3.4. ホモトピー同値

1.4 写像錐 7

## 1.4 写像錐

 $\mathscr{C}$  を加法圏とし  $f: X \to Y$  を  $C(\mathscr{C})$  の射とする.

定義 1.4.1. f の写像錐 M(f) とは次で定まる  $C(\mathscr{C})$  の対象である.

$$\begin{cases} M(f)^n = X^{n+1} \oplus Y^n, \\ d_{M(f)}^n = \begin{bmatrix} d_{X[1]}^n & 0 \\ f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix} \end{cases}$$

射  $\alpha(f)$ :  $Y \to M(f)$  と  $\beta(f)$ :  $M(f) \to X[1]$  を次で定める.

(1.4.1) 
$$\alpha(f)^n = \begin{bmatrix} 0 \\ \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix},$$

$$\beta(f)^n = \begin{bmatrix} \mathrm{id}_{X^{n+1}} & 0 \end{bmatrix}.$$

コメント (4/24). 「どうして逆に  $X \to M(f)$  や  $M(f) \to Y$  じゃないんですか?」 例えば,逆に  $\Gamma^n \colon M(f)^n \to Y^n$  を  $\begin{bmatrix} 0 & \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix}$  で定めようとしても,

$$\begin{split} \Gamma^{n+1} \circ d^n_{M(f)} &= \begin{bmatrix} 0 & \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} d^n_{X[1]} & 0 \\ f^{n+1} & d^n_Y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f^{n+1} & d^n_Y \end{bmatrix}, \\ d^n_Y \circ \Gamma^n &= d^n_Y \circ \begin{bmatrix} 0 & \mathrm{id}_{Y^n} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & d^n_Y \end{bmatrix} \end{split}$$

となり、両者は一致しない.したがって、 $\Gamma$  は複体の射にならない. $X \to M(f)$  も同様である.したがって、M(f) に対して定まる自然な射は  $\alpha,\beta$  のようにせざるを得ない.

補題 1.4.2. 任意の  $C(\mathcal{C})$  の射  $f\colon N\to Y$  に対し、 $\phi\colon X[1]\to M(\alpha(f))$  で次の条件をみたすものが存在する.

- $1. \phi$  は  $K(\mathscr{C})$  で同型である,
- 2. 次の図式は  $K(\mathscr{C})$  で可換になる:

$$Y \xrightarrow{\alpha(f)} M(f) \xrightarrow{\beta(f)} X[1] \xrightarrow{-f[1]} Y[1]$$

$$\downarrow^{\mathrm{id}_{Y}} \qquad \downarrow^{\mathrm{id}_{M(f)}} \qquad \downarrow^{\phi} \qquad \downarrow^{\mathrm{id}_{Y[1]}}$$

$$Y \xrightarrow{\alpha(f)} M(f) \xrightarrow{\alpha(\alpha(f))} M(\alpha(f)) \xrightarrow{\beta(\alpha(f))} Y[1].$$

2023/05/01

## 1.5 三角圏

 $\mathscr{C}$  を加法圏とし、 $T:\mathscr{C}\to\mathscr{C}$  を自己関手とする。 $\mathscr{C}$  の三角とは射の列

$$X \to Y \to Z \to T(X)$$

のことである.

定義 1.5.1. 三角圏  $\mathscr C$  は次のデータ (1.5.1), (1.5.2) と規則 (TR0)–(TR5) からなる. 1.5.1

#### データ

(1.5.1) 加法圏  $\mathscr{C}$  と自己関手  $T:\mathscr{C} \to \mathscr{C}$  の組,

(1.5.2) 特三角 (distinguished triangle) の族.

規則 (TR0) 特三角に同形な三角は特三角である.

- $(\operatorname{TR}1)$  任意の対象  $X \in \mathscr{C}$  に対し, $X \xrightarrow{\operatorname{id}_X} X \longrightarrow 0 \longrightarrow T(X)$  は特三角である.
- (TR2)  $\mathscr{C}$  の任意の射  $f\colon X\to Y$  は特三角  $X\stackrel{f}{\to} Y\to Z\to T(X)$  に埋め込める. つまり  $Z\in\mathscr{C}$  で  $X\stackrel{f}{\to} Y\to Z\to T(X)$  が特三角となるものが存在する.
- $(TR3) \quad X \xrightarrow{f} Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X) \text{ が特三角であることと } Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X) \xrightarrow{-T(f)} T(Y) \text{ が特三角であることは同値である.}$
- (TR4) 2つの特三角  $X \xrightarrow{f} Y \to Z \to T(X), X' \xrightarrow{f'} Y' \to Z' \to T(X')$  に対し、可換図式

$$X \xrightarrow{f} Y$$

$$\downarrow u \qquad \qquad \downarrow v$$

$$X' \xrightarrow{f'} Y'$$

は特三角の射に埋め込める.

(TR5) (八面体公理). 3つの特三角

$$X \xrightarrow{f} Y \to Z' \to T(X),$$

$$Y \xrightarrow{g} Z \to X' \to T(Y),$$

$$X \xrightarrow{g \circ f} Z \to Y' \to T(X)$$

に対し,

## 1.6 圏の局所化

## 第2章

## 層

## 2.1 層の演算

### 2.1.1 部分集合から定まる関手

X を位相空間とする. Z を X の部分集合とし、 $j: Z \hookrightarrow X$  を包含写像とする.

■制限の一般的な定義  $F \in Sh(X)$  に対し,

(2.1.1) 
$$F|_{Z} := j^{-1}F,$$
(2.1.2) 
$$\Gamma(Z; F) := \Gamma\left(Z; j^{-1}F\right)$$

とおく. Z が開集合のとき,元の定義に一致する.

元の定義に一致することのチェック.  $U \subset Z$  を開集合とすると,

$$\begin{split} \Gamma\left(U;j^{-1}F\right) &= \varinjlim_{j(U)\subset V} F(V) \\ &= F(j(U)) = F(U) = F|_{Z}(U) \end{split}$$

となる.

■順像を用いた閉集合での定義 Z が閉集合であるときを考える. このとき,  $F \in \mathrm{Sh}(X)$  に対し,

$$F_Z := j_* j^{-1} F$$

とおく.

コメント 2.1.1. 池ノート [Ike21] や竹内 [Tak17] だと,固有順像 (2.1.2 項) を定義してから, $j_!j^{-1}F$  で切り落としを定義している.閉集合からの包含写像に対しては  $j_!=j_*$  であり,これらの定義は一致する.

10 第2章 層

#### 2.1.2 固有順像

 $f_!$ :  $\operatorname{Sh}(X) \to \operatorname{Sh}(Y)$  について,f がプロパーなら  $f_! \cong f_*$  である.つまり,コメント 2.1.1 の主張はもっと一般に f がプロパーなら成り立つ.

### 2.2 弱大域次元

アーベル層の圏はアーベル圏になる. したがって層の導来圏が考えられる.

・⊗・の導来関手を考えたいが、テンソルに関する複体が有界になるとは限らないので、 平坦分解の長さが有限になるという仮定をおく.

#### 命題 **2.2.1.** *A* を環とする.

- 1. 自由加群は射影加群である.
- 2. 射影加群は自由加群の自由加群の直和因子である.
- 3. 射影加群は平坦加群である.
- 4.  $n \ge 0$  を整数とする. 次の条件 (a)–(b)<sup>op</sup> は同値である.
  - (a) 任意の j > n,  $N \in \text{Mod}(A^{\text{op}})$ ,  $M \in \text{Mod}(A)$  に対し、 $\text{Tor}_{i}^{A}(N, M) = 0$
  - (b) 任意の  $M \in \text{Mod}(A)$  に対し、分解

$$0 \to P^n \to \cdots \to P^0 \to M \to 0$$
 ( $P^j$  は平坦)

が存在する.

 $(b)^{op}$  任意の  $M \in Mod(A^{op})$  に対し、分解

$$0 \to P^n \to \cdots \to P^0 \to M \to 0$$
 ( $P^j$  は平坦)

が存在する.

証明. 1. M を自由加群とする. 左 A 加群の全射 g: N woheadrightarrow N' に対し,

$$g_* \colon \operatorname{Hom}_A(M,N) \to \operatorname{Hom}_A(M,N')$$
 in  $\operatorname{Mod}(\mathbf{Z})$ 

が全射であることを示す。 $\psi\colon M\to N'$  を A 加群の射とする。I を  $M\cong A^{\oplus I}$  となる添字集合とすると任意の  $m\in M$  は,M の生成系  $(m_i)$  と  $(a_i)_i\in A^{\oplus I}$  を用いて, $m=\sum_{i\in I}a_im_i$  とかける。このとき,

$$\psi(m) = \sum_{i} a_i \psi(m_i) \in N'$$

であり、g が全射なので、 $n \in N$  で

$$g(n) = \psi(m) = \sum_{i} a_i \psi(m_i), \quad \psi(m_i) = g(n_i)$$

2.2 弱大域次元 11

となるものがある. この  $(n_i)_i$  に対して,  $\phi: M \to N$  を

$$\phi(m_i) = n_i$$

で定めると,

$$(g_*(\phi))(m_i) = g \circ \phi(m_i) = g(n_i) = \psi(m_i)$$

となる.

2. P を射影加群とする. 自由加群  $A^{\oplus I}$  と全射 p:  $A^{\oplus I}$   $\rightarrow$  P が存在する. 実際, I=P として,p を  $p((a_x)_{x\in P})=\sum_{x\in P}a_xx$  と定めればよい.  $Q=\operatorname{Ker} p$  とすると,

$$0 \to Q \hookrightarrow A^{\oplus I} \twoheadrightarrow P \to 0$$

は完全列である.このとき,P が射影加群であることから, $\mathrm{id}_P$  に対して, $u\colon P\to A^{\oplus I}$  で

$$p_*(u) = p \circ u = \mathrm{id}_P$$

となる者が存在する. したがって、上の完全列は分裂し、 $A^{\oplus I} \cong P \oplus Q$  となる.

3. まず「自由  $\Rightarrow$  平坦」を示す.  $F = A^{\bigoplus I}$  を自由加群とし、

$$0 \rightarrow N_1 \rightarrow N_2 \rightarrow N_3 \rightarrow 0$$

を右 A 加群の完全系列とする.

$$0 \to N_1 \otimes A^{\bigoplus I} \to N_2 \otimes A^{\bigoplus I} \to N_3 \otimes A^{\bigoplus I} \to 0$$

において,

$$N_1 \otimes A^{\bigoplus I} \cong N_1^{\bigoplus I}, \quad N_2 \otimes A^{\bigoplus I} \cong N_2^{\bigoplus I}$$

であり、 $j: N_1 \to N_2$  は単射なので、

$$\bigoplus_{i \in I} j_i \colon N_1^{\bigoplus I} \to N_2^{\bigoplus I}$$

で

12 第 2 章 層

## 2.3 非特性変形補題

命題 **2.3.1** ([KS90, Prop. 2.5.1]). X を位相空間とし,Z を部分空間とする. F を X 上の層とし,自然な射

$$\psi \colon \varinjlim_{U \in I_Z} \Gamma(U; F) \to \Gamma(Z; F)$$

を考える.

- (i)  $\psi$  は単射である.
- (ii) X がハウスドルフで Z がコンパクトならば、 $\psi$  は同型である.

命題 2.3.2 ([KS90, Prop. 1.12.4]).

$$\phi_k \colon H^k(\varinjlim X) \to \varprojlim H^k(X_n)$$

について,  $H^{i-1}(X_n)$  が ML 条件を満たすならば,  $\phi_k$  は一対一対応である.

命題 2.3.3 ([KS90, Prop. 1.12.6]).  $(X_s, \rho_{s,t})$  を実数を添字とする射影系とする.

$$\lambda_s \colon X_s \to \varprojlim_{r < s} X_r, \quad \mu_s \colon \varinjlim_{t > s} X_t \to X_s$$

がどちらも単射(全射)ならば、すべての実数  $s_0 \le s_1$  に対し、 $\rho_{s_0,s_1}\colon X_{s_1}\to X_{s_0}$  は単射(全射)となる.

命題 **2.3.4** ([KS90, Prop. 2.7.2, 非特性変形補題]). X をハウスドルフ空間とし,  $F \in D^+(\mathbf{Z}_X)$  とする. また,  $(U_t)_{t \in \mathbf{R}}$  を X の開集合の族で次の条件 (i)–(iii) をみたすものとする.

- (i) 任意の実数 t に対し、 $\bigcup_{s < t} U_s = U_t$  が成り立つ.
- (ii) 任意の実数  $s \leq t$  に対し, $\overline{U_t U_s} \cap \text{supp } F$  はコンパクト集合である.
- (iii) 実数 s に対して  $Z_s=\bigcap_{t>s}\overline{U_t-U_s}$  とおくとき,任意の実数  $s\leq t$  と任意の点  $x\in Z_s-U_t$  に対して  $(\mathrm{R}\Gamma_{X-U_t}(F))_x=0$  が成り立つ.

このとき、任意の実数tに対して、次の同型が成り立つ。

$$R\Gamma\left(\bigcup_{s\in\mathbf{R}}U_s;F\right)\stackrel{\sim}{\longrightarrow} R\Gamma(U_t;F)$$

2.3 非特性変形補題 **13** 

証明.次の条件を考える.

$$(a)_k^s : \lim_{\longrightarrow} H^k(U_t; F) \xrightarrow{\sim} H^k(U_s; F)$$

$$(a)_k^s : \lim_{t \to s} H^k(U_t; F) \xrightarrow{\sim} H^k(U_s; F)$$
$$(b)_k^t : \lim_{s < t} H^k(U_s; F) \xleftarrow{\sim} H^k(U_t; F)$$

任意の実数 s と任意の整数 k に対して  $(a)_k^s$  が、任意の実数 t と任意の整数  $k < k_0$  に対 して  $(b)_k^t$  が成り立つとする. このとき,  $k_0$  に対し,  $(b)_{k_0}^t$  が成り立つことを示す. 命題 2.3.3 より, $((a)_k^s$  の方が  $\mu_s$ , $(b)_k^t$  の方が  $\lambda_t$  として)各次数  $k < k_0$  と各実数  $s \le t$  に 対し,

$$(2.3.1) H^k(U_t; F) \xrightarrow{\sim} H^k(U_s; F)$$

が成り立つ. このとき,tを固定して、射影系 $\left(H^{k_0-1}\left(U_{t-\frac{1}{n}};F\right)\right)_{n\in\mathbb{N}}$ を考えると、こ れは ML 条件をみたす.

::) 任意の  $n \in \mathbb{N}$  に対し,

$$\rho_{n,p}\left(H^{k_0-1}\left(U_{t-\frac{1}{p}};F\right)\to H^{k_0-1}\left(U_{t-\frac{1}{n}};F\right)\right)$$

はすべて同形なので, 当然安定.

よって、命題 2.3.2 より  $(b)_{k_0}^t$  が従う. k に関する帰納法により、どの  $t \in \mathbf{R}$  と  $k \in \mathbf{Z}$  に 対しても  $(b)_k^t$  が成り立つ.

命題 2.7.1 を 
$$\left(H^{k}\left(U_{n};F\right)\right)_{n\in\mathbf{N}}$$
 に用いると $\leftarrow$ わかってない

kに関する帰納法で,定理の結論

$$R\Gamma\left(\bigcup_{s\in\mathbf{R}}U_s;F\right)\stackrel{\sim}{\longrightarrow} R\Gamma(U_t;F)$$

が従う.

 $(a)_k^s$  の証明  $\ X$  を  $\mathrm{supp}\, F$  におきかえて、どの実数  $s \leq t$  に対しても  $\overline{U_t - U_s}$  はコンパ クトとしてよい.次の d.t. を考える\*1.

$$R\Gamma_{(X-U_t)}(F)|_{Z_s} \to R\Gamma_{(X-U_s)}(F)|_{Z_s} \to R\Gamma_{(U_t-U_s)}(F)|_{Z_s} \xrightarrow{+1} .$$

仮定 (iii) より、左と真ん中の 2 つは 0 なので、d.t. の性質から、 $\mathrm{R}\Gamma_{(U_t-U_s)}(F)|_{Z_s}=0$  と なる. したがって、任意の $k \in \mathbf{Z}$ と $t \ge s$ に対し、

$$0 = H^{k}(Z_{s}; R\Gamma_{(U_{t}-U_{s})}(F))$$

$$= \varinjlim_{U \supset Z_{s}} H^{k}(U \cap U_{t}; R\Gamma_{X-U_{s}}(F))$$

$$R\Gamma_{Z'}(F) \to R\Gamma_Z(F) \to R\Gamma_{Z-Z'}(F) \xrightarrow{+1}$$

を用いる. 但し, Z は X の局所閉集合, Z' は Z の閉集合である.

<sup>\*1 [</sup>KS90, (2.6.32)] Ø d.t.

14 第 2 章 層

となる.

 $\mathrm{R}\Gamma_{U_t-U_s}(F)$  は X 上の層で,それを  $Z_s$  に制限した  $\mathrm{R}\Gamma_{U_t-U_s}(F)|_{Z_s}$  は  $Z_s$  上の層である. $Z_s$  での大域切断  $\mathrm{R}\Gamma(Z_s;\mathrm{R}\Gamma_{U_t-U_s}(F)|_{Z_s})$  のコホモロジーを とっているので,[KS90, Notations 2.6.8] の 2 番目の記号を用いることに なる.

 $Z_s$  はハウスドルフ空間 X のコンパクト集合  $\overline{U_t-U_s}$  の共通部分として表されているので,コンパクトである(X の置き換えがここに効いている). したがって, $[KS90, Remark\ 2.6.9\ (ii)]$  の場合に当てはまり,そこでの記号を用いて書くと

$$H^{j}(Z;F) \simeq \varinjlim_{U \in I_{Z}} H^{j}(U;F)$$

が成り立つ. これが上の式の2つ目の変形. 詳しく書くと,

$$H^{k}(Z_{s}; R\Gamma_{U_{t}-U_{s}}(F)) = \varinjlim_{U \in I_{Z}} H^{k}(U; R\Gamma_{U_{t}-U_{s}}(F))$$
$$= \varinjlim_{U \in I_{Z}} H^{k}(U \cap U_{t}; R\Gamma_{X-U_{s}}(F))$$

ここで、2 つ目の変形は次のように考える。 $U_t-U_s$  に台を持つ層の U 上の切断は  $U\cap U_t$  上で切断を考えても同じ。台の方も,U が  $Z_s$  に十分近ければ  $X-U_s$  で考えても同じ。

2.9 実・複素多様体上の層の例

ここで層の例をいくつか挙げる. そのうちの大部分については 11 章で詳しい説明を与えることにする.

### 2.9.1 層 $C_X^0$

位相空間 X において,X の開集合 U に対し複素数値連続関数の空間  $C^0(U)$  を対応させ,制限射を通常の関数の制限で定めた前層は明らかに層になる.この層を  $C_X^0$  で表す.定数層  $\mathbf{Z}_X$  は  $\mathbf{Z}$  値関数のなす  $C_X^0$  の部分層とみなせる.

## 2.9.2 層 $\mathcal{L}^1_{\mathrm{loc},dx}$

U をユークリッド空間  $\mathbf{R}^n$  の開集合とし, $L^1(U;dx)$  を  $\mathbf{R}^n$  上のルベーグ測度 dx に関する U 上の可積分関数の空間とする.前層  $U\mapsto L^1(U;dx)$  は層ではない.この前層から誘導された  $\mathbf{R}^n$  上の層を  $\mathcal{L}^1_{\mathrm{loc},dx}$  で表す.

#### 2.9.3 環付き空間

環付き空間  $(X, \mathscr{A}_X)$  とは位相空間 X に環の層  $\mathscr{A}_X$  をあわせたものをいう.環付き空間の射  $f\colon (Y, \mathscr{A}_Y) \to (X, \mathscr{A}_X)$  は連続写像  $f\colon X \to Y$  に環の層の射  $f^{-1}\mathscr{A}_X \to \mathscr{A}_Y$  をあわせたものをいう.A が環で  $\mathscr{A}_X$  が A 代数の層である(すなわち層の射  $A_X \to \mathscr{A}_X$  が存在する)とき, $(X, \mathscr{A}_X)$  を A 環付き空間と呼ぶ.

#### 2.9.4 $C^{\alpha}$ 多様体

 $\alpha$  を整数  $0 \le \alpha < \infty$  または  $\alpha = \omega$  とする.  $\mathbf{R}^n$  上の複素数値  $C^\alpha$  級関数( $C^\omega$  のとき 実解析的関数)の層を  $C^\alpha_{\mathbf{R}^n}$  で表す. n 次元実  $C^\alpha$  多様体 M とは,無限遠点で可算な局所 コンパクト空間 M と環の層  $C^\alpha_M$  の組で, $\mathbf{C}$  環付き空間として  $(\mathbf{R}^n, C^\alpha_{\mathbf{R}^n})$  と局所的に同型であるものをいう.

 $\dim X$ (または  $\dim_{\mathbf{R}} X$ )で実多様体 X の次元を表す。文献によっては層  $C_M^\omega$  を  $\mathscr{A}_M$  で表すことも多い。

微分幾何学の基礎的な課程として Guillemin-Pollack[GP74] を挙げる.

### 2.9.5 向きづけ、微分形式、密度

 $C^0$  多様体 M 上の層として,向きづけ層  $\mathrm{or}_M$  を考えることも必要になってくる. $\mathrm{or}_M$  は  $\mathbf{Z}_M$  と局所的に同型な層であり,M の向きが存在する場合,その向きを選ぶことと同型  $\mathrm{or}_M\cong \mathbf{Z}_M$  を選ぶことが同義となるようなものである. $\mathrm{or}_M$  については次章で詳しくしらべる.

いま, $\alpha=\infty$  または  $\alpha=\omega$  とし,p を整数とする. $C_M^\alpha$  を係数にもつ p 次微分形式の層を  $C_M^{\alpha,(p)}$  とおく.また外微分を  $d\colon C_M^{\alpha,(p)}\to C_M^{\alpha,(p+1)}$  で表す.

 $(x_1,\ldots,x_n)$  が M 上の局所座標系であるとする. このとき, p 形式 f は次の形にただ一通りに表されるのであった.

$$f = \sum_{|I|=p} f_I dx_I,$$

ここに,  $I = \{i_1, \dots, i_p\} \subset \{1, \dots, n\}$ ,  $(i_1 < i_2 < \dots < i_p)$ ,  $dx_I = dx_{i_1} \wedge \dots \wedge dx_{i_p}$  で,  $f_I$  は  $C_M^{\alpha}$  の切断である。このとき,

$$df = \sum_{i=1}^{n} \sum_{|I|=p} \frac{\partial f_I}{\partial x_i} dx_i \wedge dx_I$$

となるのであった. もうひとつ層を導入する.

$$\mathscr{V}_M^{\alpha} \coloneqq C_M^{\alpha,(n)} \otimes \operatorname{or}_M$$

 $(\alpha = \infty$  または  $\alpha = \omega$ ) とおき, M 上の  $C^{\alpha}$  密度の層とよぶ.

16 第2章 層

コンパクト台をもつ $C^{\infty}$ 密度は積分することができる。 $\int_{M}$ ・で積分写像

(2.9.1) 
$$\int_{M} \cdot: \Gamma_{c}(M; \mathscr{V}_{M}^{\infty}) \to \mathbf{C}$$

を表す.  $C_M^{\alpha,(p)}$  と  $\mathscr{V}_M^{\alpha}$  は  $C_M^{\alpha}$  加群の層である.

「1 の分割」の存在から,層  $C_M^{\alpha}$ , $C^{\alpha,(p)}$ , $\mathscr{V}_M^{\alpha}$  は  $\alpha \neq \omega$  に対しては c 柔軟であることが従う.層  $C_M^{\omega}$ , $C^{\omega,(p)}$ , $\mathscr{V}_M^{\omega}$  は関手  $\Gamma(M;\cdot)$  に対し非輪状,すなわち j>0 に対し $H^j(M;C_M^{\omega})=0$  である.Grauert[G58] を参照.

#### 2.9.6 分布と超関数

 $C^{\infty}$  多様体 M 上にはシュワルツ分布の層  $\mathscr{D}b_{M}$  が自然に定まる(Schwartz[S66],de Rham[R55] を参照)。  $\mathscr{D}b_{M}$  は c 柔軟層であり, $\Gamma_{c}(M;\mathscr{D}b_{M})$  は  $\Gamma(M;\mathscr{V}_{M}^{\infty})$  の双対位相線形空間である.ただし, $\Gamma(M;\mathscr{V}_{M}^{\infty})$  にはフレシェ空間としての自然な位相を入れている.

 $C^\omega$  多様体 M 上にも同様に佐藤超関数の層  $\mathcal{B}_M$  が自然に定まる(佐藤 [Sa59] を参照)。  $\mathcal{B}_M$  は脆弱層であり, $\Gamma_c(M;\mathcal{B}_M)$  は  $\Gamma(M;\mathcal{V}_M^\omega)$  の双対位相線形空間である。ただし,  $\Gamma(M;\mathcal{V}_M^\omega)$  には DFS 空間としての自然な位相を入れている(Martineau と Schapira に 詳細な解説がある)。 しかし,佐藤による構成は純粋にコホモロジーによるものである。 後ほど 2.9.13 項で復習する。

積分写像 (2.9.1) はペアリング

$$(2.9.2) \qquad \Gamma(M; C_M^{\infty}) \times \Gamma_c(M; \mathscr{V}_M^{\infty}) \longrightarrow \mathbf{C}$$

$$(f, g) \qquad \longmapsto \int_M fg$$

を定める。このペアリングから  $C_M^\infty$  から  $\mathscr{D}b_M$  への層の射がひきおこされ,この射が単射であることも示せる。さらに,実解析多様体 M の上では,単射  $\Gamma(M;\mathcal{V}_M^\omega) \to \Gamma(M;\mathcal{V}_M^\infty)$ から射  $\mathscr{D}b_M \to \mathscr{B}_M$  が引き起こされ,こちらも単射であることがわかる.

分布係数の p 形式の層  $\mathscr{D}_{M}^{(p)}\coloneqq C_{M}^{\infty,(p)}\otimes_{C_{M}^{\infty}}\mathscr{D}b_{M}$  や超関数係数の p 形式の層  $\mathscr{B}_{M}^{(p)}\coloneqq C_{M}^{\omega,(p)}\otimes_{C_{M}^{\omega}}\mathscr{B}_{M}$  も定義することができる。 $\mathscr{D}b_{M}^{(p)}$  は  $\mathbf{c}$  柔軟層, $\mathscr{B}_{M}^{(p)}$  は脆弱層である。

- 2.9.7 ド・ラーム複体
- 2.9.8 複素多様体
- 2.9.9 ドルボー複体
- 2.9.11  $\mathcal{O}_X$  のコホモロジー

Hörmander が  $\mathcal{O}_X$  のコホモロジーについて詳しく調べている.  $\Omega$  が  $\mathbf{C}^n$  の開集合であるとする. 任意の j>0 に対し  $H^j(\Omega;\mathcal{O}_X)=0$  であるとき,  $\Omega$  は擬凸であるという. た

とえば、凸領域は擬凸であり、n=1 なら、任意の領域が擬凸となる。最後の主張は次のように一般化できる。

$$\left\{ \begin{array}{l} \Omega \text{ が }\mathbf{C}^n \text{ opp集合ならば、任意の } j \geqq n \text{ に対し、} \\ H^j(\Omega;\mathscr{O}_{\mathbf{C}^n}) = 0 \\ \text{が成り立つ.} \end{array} \right.$$

ドルボー分解と、方程式  $\sum_{j=1}^n \frac{\partial}{\partial z_j} \frac{\partial}{\partial \bar{z}_j} f = g$  が  $\Gamma(\Omega; C^\infty_{\mathbf{R}^{2n}})$  でいつでも解けるという事実とを用いた (2.9.3) の証明が Malgrange[1] で述べられている.

X を n 次元複素多様体とし,Z を X の局所閉部分集合とする. $x \in Z - \operatorname{Int} Z$  ならば, $j \notin [1,n]$  に対し

$$(2.9.4) H_Z^j(\mathscr{O}_X)_x = 0$$

となる. 実際, j=0 の場合, これは「解析接続の原理」そのものであり, j>n の場合は, (2.9.3) から, 或いは (2.9.9) から従う (すなわち  $\mathcal{O}_X$  の脆弱次元は n である).

Martineau と柏原による  $H_Z^j(\mathcal{O}_X)$  が消滅するための規準がある (SKK も参照).  $X=\mathbb{C}^n$  とし Z を X の部分閉凸集合とする.  $x \in Z$  のとき,

- 2.9.12 正則関数の境界値
- 2.9.13 佐藤超関数
- 2.9.14 局所定数層の例

## 第3章

## Poincaré-Verdier 双対性

### 3.1 上付きびっくり

[B+84, V, 6.1] A に対し、全射  $P \rightarrow A$  で、P が零で延長した層  $R_U$  の直和であるものが存在する.

補題 **3.1.1.** [B+84, V. Proposition 6.5]  $S,A \in Sh(X)$  とする. S が c 柔軟であり,S,A のどちらかは平坦であるとする. このとき, $A\otimes S$  は c 柔軟である.

証明. 完全列

$$(3.1.1) 0 \to P_n \to P_{n-1} \to \cdots \to P_0 \to A \to 0$$

で  $0 \leq j \leq n-1$  に対し, $P_j$  が層  $R_U$  の直和となり,したがって平坦となるものがある.系列

$$(3.1.2) 0 \to P_n \otimes S \to P_{n-1} \otimes S \to \cdots \to P_0 \otimes S \to A \otimes S \to 0$$

についても、S が平坦であることから、あるいは、A が平坦であれば系列 (3.1.1) の各項が平坦となることから完全になる.

補題 **3.1.2.** [B+84, VI. Théorème 3.5] G が  $\mathrm{K}^+(Y)$  の対象ならば、 $f_K^!(G)$  は  $\mathrm{K}^+(X)$  の対象である.

証明.  $(U_{\alpha})_{\alpha \in \Lambda}$  を X の開集合族とする.  $U = \bigcup_{\alpha \in \Lambda} U_{\alpha}$ ,  $U_{\alpha\beta} = U_{\alpha} \cap U_{\beta}$  とおき, 系列

$$0 \to f_K^!(G)(U) \xrightarrow{\varphi} \prod_{\alpha \in \Lambda} f_K^!(G)(U_\alpha) \xrightarrow{\psi} \prod_{(\alpha,\beta) \in \Lambda \times \Lambda} f_K^!(G)(U_{\alpha\beta})$$

を考える. ここに,

$$\varphi(s) = (\rho_{U_{\alpha}, U}(s))_{\alpha \in \Lambda},$$

$$\psi\left(\left(s_{\alpha}\right)_{\alpha \in \Lambda}\right) = \left(\rho_{U_{\alpha\beta}, U_{\alpha}}\left(s_{\alpha}\right) - \rho_{U_{\alpha\beta}, U_{\beta}}\left(s_{\beta}\right)\right)_{(\alpha, \beta) \in \Lambda \times \Lambda}$$

である. この系列が完全であることを示す.

#### 3.1.1 構成

X,Y を局所コンパクト空間とし、 $f:Y\to X$  を連続写像とする。A を大域次元が有限な可換環とする。 $F\in \mathrm{D}^+(A_X),G\in \mathrm{D}^+(A_Y)$  とする。

 $Rf_!: D^+(A_Y) \to D^+(A_X)$  の右随伴関手  $f^!: D^+(A_X) \to D^+(A_Y)$  を構成する. まず、開集合  $V \subset Y$  に対し、 $f^!F$  の V 上の切断に関する条件を見てみる.

$$R\Gamma(V; f^!F) = R \operatorname{Hom}_{A_Y}(A_V, f^!F) = R \operatorname{Hom}_{A_X}(R f_!A_V, F)$$

となることから、 $f^!F$  は  $V \mapsto \operatorname{R}\operatorname{Hom}_{A_X}(\operatorname{R} f_!A_V,F)$  という対応でなければならない。  $\operatorname{R} f_!$  を計算するには  $\operatorname{c}$  柔軟分解  $A_V \sim K$  を取ればよく、さらに F が入射的であれば、

$$\operatorname{R}\operatorname{Hom}_{A_X}(\operatorname{R} f_!A_V, F) = \operatorname{Hom}_{A_X}(f_!K_V, F)$$

となって, 結局

$$R\Gamma(V; f^!F) = \operatorname{Hom}_{A_X}(f_!K_V, F)$$

とできる.

#### **■** *f* に関する仮定

定義 3.1.3. Y 上の層 G が f 柔軟であるとは、各点  $x \in X$  に対し、 $G|_{f^{-1}(x)}$  が c 柔軟であることをいう.

G が f 柔軟であることと,任意の開部分集合  $V\subset Y$  と  $j\neq 0$  に対し, $\mathbf{R}^j$   $f_!G_V=0$  となることと同値である.

次を仮定する.

$$f_! \colon \operatorname{Mod}(\mathbf{Z}_Y) \to \operatorname{Mod}(\mathbf{Z}_X)$$
 のコホモロジー次元は有限である.

つまり、整数  $r \ge 0$  で、全ての j > r に対し  $\mathbf{R}^j$   $f_! = 0$  となるものが存在する. (3.1.3) は次の条件と同値である.

(3.1.4) 
$$\begin{cases} \text{任意の } G \in \text{Sh}(Y) \text{ に対し,完全列} \\ 0 \to G \to G^0 \to \cdots \to G^r \to 0 \\ \text{で,どの } G^j \text{も } f \text{ 柔軟であるものが存在する.} \end{cases}$$

$$\begin{cases} 完全列 \ G^0 \to \cdots \to G^r \to 0 \\ \text{において, } j < r \ \text{に対し} \ G^j \ \text{が} \ f \ \text{柔軟ならば,} \\ G^r \ \text{が} \ f \ \text{柔軟となる.} \end{cases}$$

 $f_!$  のコホモロジー次元が  $\le r$  となるのは、任意の  $x \in X$  に対し、 $\Gamma_c(f^{-1}(x);\cdot)$  のコホモロジー次元が  $\le r$  となるときである。実際、 $f_!|_{f^{-1}(x)}F = \Gamma_c(f^{-1}(x);F) = 0$  となるので、

3.1 上付きびっくり 21

#### ■構成 以上の仮定は,

$$R\Gamma(V; f^!F) = \operatorname{Hom}_{A_X}(f_!K_V, F)$$

の構成をするためだった.  $f_!K_V$  の分解をしたくて、その長さが有限になるという仮定である.

さて、K を  $\mathbf{Z}_Y$  加群、F を  $A_X$  加群とする.このとき、A 加群の前層  $f_K^!F$  を次で定める. $V \in \mathsf{Open}(Y)$  に対し、

$$(f_K^!F)(V) := \operatorname{Hom}_{A_X} \left( f_! \left( A_Y \underset{\mathbf{Z}_Y}{\otimes} K_V \right), F \right)$$

とする. 制限射は  $K_{V'} \to K_V$  から引き起こされるもの.

補題 3.1.4. K を平坦かつ f 柔軟な  $\mathbf{Z}_Y$  加群とする.

- (i) Y 上の任意の層 G に対し  $G \otimes_{\mathbf{Z}_Y} K$  は f 柔軟である.
- (ii)  $G \mapsto f_!(G \otimes_{\mathbf{Z}_Y} K)$  は  $\operatorname{Mod}(\mathbf{Z}_Y)$  から  $\operatorname{Mod}(\mathbf{Z}_X)$  への完全関手である.

証明. (i) Y 上の任意の層 G は分解

$$\rightarrow G^{-r} \rightarrow \cdots \rightarrow G^0 \rightarrow G \rightarrow 0$$

で、各 $G^j$  が $\mathbf{Z}_V$  の直和となるものが存在する.

aa

# 参考文献

- [B+84] Borel, *Intersection Cohomology*, Progress in Mathematics, 50, Birkhäuser, 1984.
- [G58] Grauert, On Levi's problem and the embedding of real analytic manifolds, Ann. Math. 68, 460–472 (1958).
- [GP74] Victor Guillemin, Alan Pollack, Differential Topology, Prentice-Hall, 1974.
- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, Sheaves on Manifolds, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [KS06] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, Categories and Sheaves, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 332, Springer, 2006.
- [R55] de Rham, Vari'et'es différentiables, Hermann, Paris, 1955.
- [Sa59] Mikio Sato, Theory of Hyperfunctions, 1959–60.
- [S66] Schwartz, Théorie de distributions, Hermann, Paris, 1966.
- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.
- [Ike21] 池祐一, 超局所層理論概説, 2021.
- [Tak17] 竹内潔, D 加群, 共立出版, 2017.